

明治時代、釧路で使われていた方言「モコ」について

山本 悅也

丘の町から下町へ下る急坂を、終日倦みもせずに、下っては上り、上っては下り、先を争ふて競争する彼らのスケーティングは一瞬千里を行くの烈い運動である。汗をしどに流して一一凍ゆる手を口に当てながら勇ましい北国の児等が唄ふを聞け一一

去れよ、(道を除け) 去れよ。

去らねば坂からモコ来るぞ一一。

「モコ」とは何を意味するのか?、訊ねても彼等は知らぬ。古老も知らぬ。斯く唄って成長した私にも解らないのである。然し彼等は別に之れを不思議ともせずに友から友へ、兄から弟へと唄伝へて、来る冬毎に唄ふのだ。

野中賢三「南国へ」より

野中賢三は、明治43年、中央の雑誌『文章世界』にこの作品を投稿し、田山花袋に優等として認められた。賢三は、明治27年、5歳の時に佐賀県から家族とともに釧路に移住し育った。この作品は、故郷、佐賀の友人にあてた書簡文の様式を取っている。しかし、大正5年、肺患が悪化し享年28歳の若さでこの世を去った。ほぼ石川啄木と同時代に活躍した。

私は釧路生まれの釧路育ちで、今69歳であるが、この「モコ」という言葉を聞いたことがない。『北海道方言辞典』(石垣福雄著)には「おぼけ。恐ろしいもの。」とあり、モッコ、モーコとも言うと書いている。関連方言として青森・福島・秋田が挙げられおり、東北方言がもとになっていると思われる。

幕末に書かれた『松前方言考』(淡斎如水著)に「モコ」が載っていた。それによると「小児をおどす時のことば。」とあり、考えてみた。

この「モコ」は、「物の怪」から来ているのではないか。

mononoke→monoke→monoko→mokoと変化したと思われる。物の怪は人にとりついて、病気や不幸をもたらすもの、悪霊だ。平安時代の『源氏物語』にも出てくる。明治の末には、すでに言葉の意味が分からず、わらべうたとして唄われ伝えられてきた。

さらにこのわらべうたのメローディが七夕の「ろうそく出せよ」の唄にとても似ていることに気が付いた。

去れよ、(道を除け) 去れよ。

(ローソク出一せー 出一せよー)

去らねば坂からモコ来るぞ一一。

(出一さーないとー かつちゃくぞー)

釧路の町は、坂が多い。当時は、スキー、スケートは乗り放題であった。賢三少年もわらべうたを唄って、自由自在に滑って、遊んでいたのであろう。